燃える富士

修羅時鳥

菊一文字

吉川英治全集

第11巻

川端　康成
小泉　信三
小林　秀雄
佐佐木茂索
獅子　文六

講談社版

著作権者の了解により検印廃止

吉川英治全集・11　燃える富士　修羅時鳥

著者　吉川英治
装幀者　杉本健吉
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽二丁目一二一　郵便番号一一二　電話東京(〇三)九四五局一一一一(大代表)　振替東京三九三〇
印刷所　凸版印刷株式会社　製本所　大製株式会社
本文用紙　日本パルプ工業株式会社特漉
第一刷　昭和四十四年七月二十日　第五刷　昭和四十九年五月二十日
定価は箱に表示してあります
© 一九六九年　吉川文子　(文2)

目次

燃える富士　一
修羅時鳥　一九七
菊一文字　三五七

燃える富士

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

淀屋離散

一

雲か、煙か。夜か昼間か。
空は鳴る――地はうごく。
どかあん！　どかあん！
十方晦冥だ。
たえまなく、鳴りはためく、大砲の音に。
何かの弾みに、ぐわらぐわらと、足もとを踏み辷らせて、常には、かなり自分の胆気を信じている淀屋平八だったが、
『わあ、あぶねえ』
と、登っている大二階の屋根――鬼瓦の頭に、抱きついて、思わず、
『桑原っ』
と、俯伏してしまった。

から聾になったように、耳が、がアんとして来た。恐々、見下ろすと、淀の大河も、盥の水みたいに揺れてる気がする。いや、河ばかりじゃない。世の中の物体が、すべて、斜ッかけに――三角に――縦横に――滅茶滅茶に――ぐるぐると、逆とンぼを打ってるように見えて、
『どうなるんだ！　いったい』
と、淀平は、宙に、竦んでいた。
日頃の度胸が、ケシ飛んでしまったように、人間の眼も、余りあてにならない。こうひどい騒動にぶつかると、網膜が、変になってしまうのだろう、太陽が、いびつになって見える。たった今、殺されたばかりな死骸の腹からハミ出してる肝臓みたいに真っ赤で――どろどろと雲間に溶けて――元治四年七月の残暑の空を流れているのだった。

二

『あつい！　ううッ暑……』
と、淀平は、うなった。
こすっても、こすっても、眼の中に汗がながれ込む。
およそ朝から屋根の上に半日以上の辛抱だった。午後は、かんかん照になって、つよい陽が直射して来た。まるで鉄板みたいに焼けてる屋根瓦の上に、腹んばいになっていると、淀平は汗の出尽した身体が、鰈の乾物みたいに、反ってしまいそうに思われた。でも、一心に、洛中の黒煙へ、手をかざしていたが、
『悪いぞ、旗いろが。――ウウム、いけねえ、敗け戦だ。久坂様、寺島様は、いねえのか。来島又兵衛様はどうしたんだ。長

州藩のうちでも、勤王派のお歴々が、揃っていながら……。ええ、忌々しい』

と、歯ぎしりをした。そして、又、弾かれたように、

『あっ、もう駄目だ。河原町に火がついた。長州藩邸が』

と、絶望的に、叫んだ時、

『おまえさん！　おまえさんてば！　いい加減に降りて来ないと――』

と、お巻が、屋下の窓口から、幾たびも、金切り声で呼びたてた。

『女房――駄目らしい』

がっかりして、屋根からいうと、

『駄目らしいじゃない、もう、長州方は総崩れですとさ。おまえさんは、朝からそんな所へ上って、一体、どこを見ているのですえ。淀の向う河岸をごらんなさいな、池田街道の方へ、あんなに、敗け崩れた長州兵が、逃げてゆくじゃありませんか』

『な――なる程』

『流れ弾が飛んでくる。はやく、降りておいでなさいよ』

『残念だな。どうにか、盛り返せねえものだろうか』

『いい加減におしなさいよ』

と、お巻はもどかしがって、

『お前さんが、いくら屋根の上に、あぐらをくんで、睨んでみた所で、敗け戦が、勝ち戦になるわけでもあるまいし。――余市が、あんなに泣いているのが、聞えないのですか』

『鉄砲玉の音に、泣くような餓鬼は、淀平の子じゃねえぞ。流れ弾に当って、死んじまえ』

『気が狂ってる！　この人は。――余市が泣いているのは、お父っさんが、あぶないといって、心配しているんですよ』

『あっ……そうか』

我が子！　淀平の頭にも、それがひらめいた。――自分が、死地にいることは、まったく、忘れていた彼だったが。

ぽん――と物干へ辷り降りて、

『女房、長州様のおかげで、四代安楽につづいて来た淀屋の屋台も、廻船御用達の看板と一緒に、お返し申す日が来たぞ。今日が、淀屋の御用仕舞。――さ、逃げるんじゃ、支度をしろ』

三

十間間口、神蔵、船蔵、淀の荷上場をまえにして、ゆうべ迄繁昌していた店さきも、今は、寺のように、人影もささない。

この間際に、何を書いたのか、帳場を出た淀平は、奥の簞笥の前に立って、自分や、余市の身支度に、そわそわしているお巻へ、それを、

『これは、途中のお守札だ。鏡ぶくろへ入れてゆけ』

といった。

『まっ、わたしに離縁状を？』

『そうだ』

と、お巻の顔いろを、なだめるように、

『縁があったら又会えよう。それ迄の離縁状、もし佐幕派に捕まった時は、それを証に、淀平とは、夫婦でないというがいい』

『そ、そんな……』

と、泣き伏すのを、叱りつけて、

『それ位な覚悟は、なぜ、ふだんにして置かない。おれは男、家代々、御用達をつとめて来た長州様が、きょうの戦に敗れた

といって、御縁はこれ迄と、いうわけには行かねえ。手前は、余市をつれて、何処へでも落ちてゆけ——余市だけを頼む』
『でも、私は』
『わからず屋め！』
と、声を変えた。
『一昨日の夜、久坂義助様、来島又兵衛様などが、お忍びでおいでなすって、この淀平へ、手をついての頼みを、手前は、聞いていなかったか。陣笠かぶって、戦にこそ立たねえが、もし長州方が勝って、禁門に立籠る時は、会津兵に、糧道を断たれる怖れがある。で——一町人の役には重すぎるが、近畿の荷を、逸はやく寄せて、兵糧の才覚をたのむぞ——といわれて、身の面目と、おひきうけした淀平だぞ』
十三歳になる、とんぼ頭の余市は、そういう父の激した顔と、畳に、ふるわせている母の肩とを、まるい眼で、見くらべていた。
『わかったか！』
『わ、わかりました……』
『いくら町人の女房でも、皆様の御苦労ぐらいは、心得ておけ。みんな、百姓町人の苦しみを、苦しんでおられるのだ。世の中の悩みを悩んでおいでなさるのだ』
『……』
『こんどの戦だって——』
ふと、淀平は、小銃の音を聞いた。いよいよ、近い。敵も味方も、兵火の洛中から雪崩れだして、この辺りまで乱戦を移して来たな——と感じたが、妻に、言い聞かせている間に、頭は妙にしんと落着いて来た。

『こないだの晩、来島様が、涙をうかべて仰しゃった。——臣として、禁門の下に、兵火をあげるの罪は承知しておるが、宮闕にかくれて、幕府と通じ、王室の補佐をあやまる佞奸共をのぞくには、もはや、兵力のほかにないと。——わかるだろう、勝っても、敗けても、死ぬお覚悟だ。そういうお方も多い中に、屋台ぼねの一つ二つ、また一時の夫婦別れぐらいが、何で悲しい。いずれ、敗けたとなれば、幕府は、長州征伐と図に乗せて追うだろう。おれは皆様のお後を追って、兵糧かつぎでも、荷駄の手伝いでも、体で出来る御恩返しをせにゃならねえ。坐っていても、日頃から、徳川方に睨まれている淀屋の家が、あしたの朝まで、無事に建っているはずはねえのだから』
『——行ってください。もう、もう、泣きはしません』
『よくいった。じゃ、余市、手前も……』
と、とんぼ頭に、父としての——最後の手をのせて、
『腕白をやって、おっ母さんを、困らしてばかりいるじゃねえぞ。日本は今、大変な秋だ。百姓は飢え、町人は生活に迷い、武士はそれを、どうにかしなければと、蹌いている。見たろう、今日の陽の色を』
『む』
と、とんぼ頭は、こッくりした。
『内輪が、そんな、大病な所へもって来て、外からは英吉利、亜米利加、仏蘭西、なんていう抜け目のねえ国が、港を開けの、兵隊を置かせろの、足もとをつけ込んで、狼みてえに、狙ってくる。——なあ余市、あぶなッかしい日本じゃねえか』
『お父っさん、それなのに、何で日本は、内輪喧嘩ばかりしてるんだろう？』

『だからよ』
淀平は、涙があふれかけた――。
『内にも、外にも、そういう日本を、今までの腐った幕府では、もうやって行かれねえんだ。――行かれたって、それが、ほんとじゃねえ。なぜって、日本は天子の国だ』
『天子の国』
『知ってるか』
『知ッてら！ そんな事。寺小屋の先生が、いつも、口癖にいうよ。――幸にして生る日東天子の国』
『えらい』
と、抱きよせて、名残に――これを名残にと、愛の頬ずりを与えようとした時だった。
がうんと、強い空気の震動が、鼓膜をつきぬいた。――と思うまに、どどどっ、と山崩れのような音響、まっ黄色な土煙り。
『あっ――余市』
夕立のように、追ってくる鬨の声に、かれは、子を、母のそばへ突き放して、二度三度、高い叫びをその後へ送った。
『――気をつけて行けよ、迷うな！ おふくろの手を、死んでも、離すじゃねえぞ』

獅子林隊

一

ふり返ると、伏見の町も火だ。住み馴れた淀のわが家も、炎炎と噴く黒煙りの下である。
『枚方は、通れない』
と道で聞いて、淀平は急に、三栗から北河内の山へはいった。
『今夜あ、提灯はいらねえ……』
赤い雲の流れを、恐ろしげに眺めながら、山の窪や森には、世帯をかついで避難している土民の家族が、幾組となく、恂んでいた。
淀平は、迷い込んだ旅人のような、困った顔をして、
『これから、大和路の方は、安全だろうな』
と、たずねた。
土民たちは、何を言うのも、恐いように、
『さあ？ ……どうだか』
『関東兵は、この道を、通ったかね』
『会津と、大垣のお侍衆が百人ほど……』
『長州兵は』
『時々……みんな片輪になって、血のかたまりが、歩いて行くようだった』
『通った？ ふーむ、何時頃』
『明るいうち』
思い出したように、美濃山の谷で、時々小銃の音がひびく。それだけでも、この方面に、だいぶ長州兵が崩れこんだ事が察しられた。
『久坂様に会いたいものだ。来島様は、どうなされたか……』
ざあっと、水音がする――笹雪崩の崖下である。渓流のしぶ

きが、雪みたいに、光って見えた。
『おやっ？』
と、淀平は闇を透かして、
『――死んでる！　幕兵だろうか、長州兵だろうか』
と、ぞっと、寒いものを肌に感じながら呟いた。
『無常無常。――戦は無常の大風だ』
笠を伏せて、急ぎ足に立ち去ろうとしたが、いや待てよ、と足を戻して、
『もし長州のお侍だったら――』
と、笹雪崩の崖を、二丈ばかり降りて行った。
水明りが仄かだった。死骸は、左の肩を、潮の飛沫に濡らしながら、顔を横に寝かして、斃れた鹿みたいに両脚をのばしていた。
『若いな、この死人は』
と、淀平はすぐ思った。同時に、長州軍の浪士隊であって、藩士でないことも、服装で読めた。
具足は着けていない、ただの小袖に、兵糧包を背中にむすび、滝縞の袴を括りあげている。――が、それはすべて、泥と血とに綻びて、惨憺たるこの人の苦戦を語っていた。
『ああ、まだ十八、九。惜しい花を』
と、胸へ手を廻して、ぐいっと、抱き起そうとすると、
『ウーム』
と、かすかに、呻いた。
『やっ、息があるッ』
と吃驚して、むしろ少し気味の悪いように、
『そういえば、何処にも、深傷らしい痕はねえようだ。こいつは拾いものかも知れねえぞ。――若いの！　イヤお武家！　気をしっかりなせえ』
と、耳に口をつけて、
『そうだ、陣中気付薬』
印籠を割って、薬を、口へ押しこんだ。
こまかい歯並の白さ、眉の気だかさ。秀麗とは、こういう顔であろう。淀平もずいぶん美少年は見たが、曾て、こういう美と品位のそろった人を見たことがない。
『ど、どうだ！　薬は、通ったか』
『あっ……』
と、美少年は、ぴくりッと、彼の手を払って、
『あなたは？』
と、うつつな眸に、身構えをとった。
『よかった。御心配なさいますな。あっしは、長州藩御用達の淀屋平八、おまえさんも、今日の戦にや、勤王軍について働きなすったお一人でございましょう』
『オオ、では其方が、いつも噂に聞く淀の平八か』
『――で、ございますが、あなた様は』
『わしか？　……』
と、美少年は、少し言い籠っていた。束ねた黒髪を、うしろに払って、流れの水を掌に掬っていた。

二

『もし、其方がここへ来なかったら……』
渇いた唇に――生命に――一口の水を含むと、かれの眸は、よけいに麗しく耀いた。見ていると、吸い込まれそうな眼元で

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ある。
『命の親』
と、つぶやいて、
『淀屋平八といえば、同志も同じ町人、話しても差つかえはあるまい。――わしは、きょうの蛤御門の戦に、長藩の人々と力をあわせて、幕兵と戦った勤王浪人の藩外軍、獅子林隊のうちの一人だ』
『あ、それでは』
と、淀平は膝を折って、
『もしや、宇治の黄檗寺獅子林院の方丈に、かくれておいで遊ばした、風速三位卿の隊ではございませんか』
『その三位卿は、激派の公卿の先鋒とにらまれて、京都から追われた後は、幕吏の眼をのがれるために、浪士の中に身を落して、今では蔵人様と変名しておいでになる』
『じゃ、まだ御無事でございましたか。――ひと頃は、長門の三田尻で、刺客に殺されたとか、便船の上から、役人のために海へ沈められたとか、いろいろな取沙汰を聞いて、お案じいたしておりましたが……』
『それどころか、諸国から集る浪人の牛耳をとって、天行組、無形組、鉄心組の三つを組織し、それをくるんで獅子林隊と名づけ、いつも遊軍の隊長として、勤王陣のまっ先に、雄々しい姿を見せています』
『して、あなたのお名は』
『その風速様とは従兄弟同士――千尋と申す』
『えっ、お従兄弟で』
と、平八は、眼をみはって、
『ちっとも存じ上げずに、とんだ御無礼をいたしました。……だが、どうしてお一人で』
『味方の敗け戦となって、多々羅の方へ落ちてゆくうち、落伍してこの始末』
『これから、歩いて行かれますかな』
『深傷はない――崖から落ちて気を失っていたとみえる』
『では多々羅まで、これからお送りいたしましょう。淀平の肩におつかまりなさいまし』
と、千尋の手をすくって、肩にかけた。
『すまないの……』
『なあに、お易い事』
と、一緒に、立ち上がろうとすると、
『あれっ……』
と、千尋は、顔を紅くして、体を曲げた。
淀平は、はっと、痺れた手をちぢめた。無考えに、千尋の胸へ、手が触ったのである。
ところが？
男には無い――決して無い、ふっくらと、もりあがった肉線が、その手に感じられたのだった。電にでも触れたように、かれの指は、びりっと驚いて、
『乳！』
と、思わず、喉の奥でさけんだ。
『――大丈夫です、ひとりで』
千尋は、そういったが、
『無理をしては』
と、強いて、背中にたすけて、渓川沿いの細い道を辿った。

だが、淀平の背中は、何うしても、柔軟な肌と、やさしい心臓を感じてならなかった。一里——二里——と歩くうちも、頭はただ、その疑惑と、悩ましさに、捉われて、何処をどう歩いたかの意識すらも淡かった。

すると——。

がさっと、前の林で、獣の起つような音がした。木暗がりに、うごく光がある。

槍、槍、幾すじもの槍の光り——が、静かに近づいて来たと思うと、無数な眼をもって、

『待てっ』

と、闇を透かしながら、

『敵か？　味方か？』

三

ばら、ばら、ばらッ——と速い村雨が木の葉を打って翔け去った。

戦の後にはよく雨がある。こぼれ雨だ。

『来島又兵衛も、唐門で、斬死したというが、ほんとか』

『久坂義助、入江九一、寺島忠三郎、長藩の目ぼしい武士が、ばたばたと討死した。何という悪日だったろう』

『忌々しいが、惨敗だ』

『幕軍め、見ておれ』

『残念だなあ！』

多々羅の沢に、七十人ばかりの兵が、落ち合っていた。浪人ばかりなので、具足を着けている者もあるし、平支度の者もあるし、雑多であった。

と、あわただしく、駈け降りて来た一人が、

『おいっ、千尋様が、見つかったぞ』

『えっ、御無事か』

『淀平という町人が今連れてくる』

『はやく、隊長に』

『そうだ』

破れた陣幕を、木から木へ張めぐらして、寂としたまま、降る夜露にぬれているのが、敗軍の将、風速三位卿のいる所だった。

やがて、そこへ、

『よかった！　天祐だ！』

と、千尋が、隊士たちや、淀平にかこまれて、どかどかと送られた。

『おう、よく……』

と、蔵人は、手をとって、

『どんなに、其方の見えぬのを、心配していたか知れぬ』

『蔵人様、この町人が救ってくれたのです。一言お声を』

『や、淀屋平八ではないか』

『まことに、お久しゅうございます。御国の為とはいえ、三位の朝臣、風速家の御曹子が、変り果た……』

と、うるんだ眼に見上げるのを、彼は笑って、

『何の、火宅の市、桑の枯れた村を見れば、蔵人が境遇などはまだまだ』

どこかに——物見をしている隊の浪士が、その時、

『二里半！　西北の方』

と、暗い空で、声たかく報じた。

『――田辺街道に、広い火の光りがうごいて来る。同じく、八幡の方面からも、約千名ほどの幕兵が、徐々にこっ方へ』
と、聞くと総立ちに、
『来るな！』
『よしっ、一戦』
『無謀無謀、死ぬなら再挙に』
『そうだ、犬死するな』
『ここで夜を明かすのは危い。――千尋様の身も分った上は、大和へ』
あわただしく、陣幕は畳まれた。
そして、無念そうな口々に、
『大和へ、大和へ』
と、敗亡の背を、うしろ寒く、秋風に趁われて落ちて行く――
山から山を漂泊する山窩のような生活が、幾日となくつづいた。淀平は、その人々に交って、労働兵のように働いた。糧食を探しにゆく、怪我人の世話をする、薪を伐る。隊士たちはみな、一月以上も、着のみ着のままだった。病人はばたばたと死んで行く。七十人ほどの人数が、晩秋の十月には、五十四、五人に減っていた。――深林の樹々に寒々と露のふる夜半など、淀平はふと目をさまして、木の葉虫みたいに、丸まって寝ている兵のすがたを眺めると、
『ああ、みんな御国のために』
と、眼のうちが熱くなってくる。
だが、気にかかるのは、あの美少年の千尋で、
『男か？　女か？』
と、かれは始終、妙な疑いに悩まされた。

又、その千尋と、隊長の風速蔵人とは、はたの見る眼も、羨ましいほど、仲がよかった。夜も、破れた幕のうちを覗くと、二人は、ひしと抱きあって眠っているのである。淀平は軽い嫉妬さえおぼえた。

捨児奇縁

一

『今に、銀峰山の頂きから、雪がふき颯して来たらどうなるか』
悲痛な、最後の日が来た――
穴みたいに窪んで、光った眼が、青白い、尖りきッた神経をもって、隊長の風速蔵人をかこんで、
『獅子林隊五十余名が、空しく、凍え死を待つのも無念だ』
『幕府は、いよいよ長州征伐を号令したという』
『どうするのだ、吾々は』
『三位卿』
『ご思案は？』
じっと、唇を嚙んでいた蔵人は、公卿らしくない――濃い、情熱的な眉を、眸をじっと重そうにあげて、
『この上は、隊を解いて、再挙の日を待つほかはあるまい』
『えっ、別れ別れに』
『だが――この儘、霧散するのではない。次の日を待つまでの

解隊じゃ。わしはふたたび、宇治の獅子林院にかくれて、機を見て、長州の志士と合体しよう。方々は一先ず、いずれへでも』

ありありと、一同の顔に、失望のいろが漲った。けれど、そうする以外に策もなかったので、悄然とうな垂れていると、ひとり千尋だけが、意志の強い、麗しい眼で、

『いや、私は退くのは嫌です、残念です。また悠々と、時節ばかりを待っている秋でもありますまい』

『千尋、そちは』

と、蔵人が、たしなめかけるのを、

『いいえ！』

と、かぶりを振って、

『関東へやらせて下さいまし。隊長っ、私を関東へ』

と、大地へ、両手をつき、額をつけて、

『お願いですっ、お願いでございます！』

と、さけんだ。

蔵人が、その熱心さに負けて、当惑していると、無形組の伍長、鈴鹿源助が、

『千尋どの。単身、関東の敵地へ参って、何をなさろうというお考えか』

『それは、兵法の極秘ですが、おたずね故に、お答えしましょう。こんどの戦で、はっきりと分ったことは、長州や薩摩などより、幕府の兵器や兵式が、はるかに進歩していることです。これは幕府が外国へ、どしどし使臣をやって、軍器を買いこみ、陸海軍の研究をさせ、洋式の戦術を採用いたしているためです』

『む』

『旧い具足や、甲冑をつけて戦った勤王軍が、敗れたのは、当りまえです。――だが、長藩は、やがて捲土重来するでしょう。幕府は、内憂外患、いくら長州征伐を号令しても、ほんとの力は出せません。そのうちに、薩摩の志士もうごき、土佐も起ち、日本の勤王党が、錦旗をすすめて、関東へ下る日も、そう遠くはないものと思われる』

『だから、その時に』

と、蔵人が、さえぎるのを、

『その時では、間にあわぬことがあります』

と、千尋は、爽やかな雄弁をつづけて――

『それは、何かというと、幕府の海軍です。吾々は、陸にばかり戦っているので、いつのまにか、怖るべき力を蓄えている関東の海軍力を忘れている。――いつかも、奇兵隊の山県様から伺いますのに、徳川家の小栗上野之介という者が、仏国と密約をむすんで、関東の横須賀村に、すばらしい製鉄所と、造船所とを興したそうです。――あれが、役に立たれると、勤王党は絶滅だ、陸で勝っても、海で勝てない、薩摩も長州も、国元があぶない、あれだけが実に恐い――と口癖にいっておいでになった』

『ウウム、それはわしも聞いた』

と、蔵人も、初めてうなずいた。

『で、私は、暫く隊長からお暇をいただき、その造船所の内輪をさぐって、あわよくば、いざという時、役に立たぬように、打ち壊してしまうが上策と、こう考えて、関東へ下る決心をいたしました。どうぞ、その役目を、この千尋においいつけ下さ

い』

何という大胆な――

又、何という鋭い眼の着け所だろう。

一同は、顔を見あわせて、暫くだまりこんでいたが、鈴鹿源助が、やがて、

『御尤もだ！』

と、まっ先に同意した。

『しかし――ただ怖れるのは、一人や二人で、そんな大事ができるか、どうかという事だが』

『多勢では、却ってだめ』

『だが、千尋どのは、尊いお体、誰か他の者に吩咐けても』

と、蔵人の眼を見ながらいうと、

『いや、自分で思ったことは、自分でやり遂げまする。三位卿の従兄弟といっても、御国のために、野に伏すうちは、ただの一兵卒にすぎませぬ。――蔵人様、いや隊長、どうぞ私に、お暇を』

『やむを得ない。――それ程に、申すならば』

『えっ、おゆるしを？』

『だが、あまり深入りはせぬようにの』

彼の熱は、とうとう蔵人をうごかした。然し、許すとはいったものの、蔵人の顔に、何か淡い淋しさが残った。

隊を解いたので、その日から、二人去り、三人去り、獅子林隊の浪士たちは、再の日まで、思い思いに離散して行った。

……今は四、五名の従者と、淀平とが、蔵人の傍にいるだけだった。

『淀平、そちに折入って、頼みがある。秘密じゃ……人のいぬ所で』

明日は、千尋とも、別れという最後の夜――そっと蔵人が彼をさし招いた。

二

その前から、淀平は、千尋の悲壮な決心を聞いて、ぜひ、彼の身を護るために、関東へ従いて行きたいと、願っていた。むろん、それは、蔵人も望むところであったし、千尋も、淀平ならば――と得心だった。

『何だろう。秘密な話とは……』

かれは、蔵人の後に尾いて行った。山の中腹に、桔梗平と呼ぶ原がある。蔵人は、石に腰をおろした。秋草の眇々とみだれ咲いている果に、魔神のような銀峰山の肩が、夜の空に、黒く見える。

『其方が、従いて行くと申してくれたので、蔵人も安心いたしたが、それに就いて、あの千尋の素性を打ち明けておきたい……』

蔵人は、直ぐにこう切り出して、

『実は、何を隠そう、千尋は男ではない、男として、武術も学問もさせて育てられて来たが、真は女じゃ』

『えっ、女？』

と、淀平は、わざと知らない顔をして、

『それは、どういう仔細で』

『しかも、この蔵人と、従兄弟といわせておるが、それも嘘。……ただ同じ乳は呑んで育ったが』

『では、乳兄弟でござりますな』

『む。乳は兄弟、血は他人じゃ。――その千尋をば、どうして風速家で育てたかというに、今は亡きわしの父、右大弁紀安卿が、御所のお帰りに、堀川の辺りで、嬰児の声をお聞きになられて、駕の内へ、拾っておいでなされた捨児なのじゃ』

『へえ……それは、何時の年で』

『今から――』

と指を繰って、

『もう十七年前になる』

不思議な！

と、淀平は心で叫んだ。

年こそ違うが――わが子、として、愛育してきたあの余市も――捨児だ。やはり、堀川の川端で、拾った児であった。

蔵人は、ことばをつづけて、

『どういうお考えか、それから父の紀安卿は、千尋を、男姿でお育てなされた。――後で聞くと、公卿の家では、女子ほど御所や幕府へのお届けがやかましいのと、きつい、討幕論者であられた故、武張ったことがお好きで、女ぎらいであった。――千尋にも、幼少から、馬術、武術を教えこみ、わしと共に成人した後は、勤王軍の真先に働けよ、と何事もそういう風なお教育であった』

『なる程、それでこそ……』

と、淀平はうなずいた。

女と男が――と始めは妙に疑っていた千尋と蔵人が、野陣の幕をかぶって、抱きあって寝ていても、それが、何の不純なものでも、不思議でもないことが、初めて、胸に解けてもいた。

『――然しの、淀平。いくら男姿に育てられても、心は女じゃ、それに年頃』

と、蔵人は悩ましげに、ふと眼をふさいで、

『誰に聞いたか、自分が、捨児ということも知ったらしい。父恋し、母恋し、とも思うであろう。――しかも、世は皮肉じゃ、生みの親は、よく分らぬが、江戸の幕臣ということを、養父の古い日記を読んで、わしも承知しておるので、先頃、話のはずみに、つい洩らしたのじゃ』

ああ、それは他人事ではない――と、淀平は自分の子――余市の身を、生みの親を、考えて、思わず身につまされていた。

『それでは、千尋様が、強って、関東へ行きたいと仰しゃるのは、もしや？　……』

『其方も思うか、わしも考えるに、真の親が恋しくなって、それが探したいのであろうと推しておる』

『そうかも知れませぬ。だが、あの御気質だから……』

『いやいや』

と、強くかぶりを振って、

『女じゃ。国家の犠牲には、なりきれぬのが当り前。――ついては、其方も、関東へ行くからには、共々、千尋の生みの親を探してくれい。又、今日からは、姿も真の女に返って、あぶない刺客の刃に狙われぬよう、くれぐれも気をつけてもらいたい。――蔵人が頼みとはこれ……。淀平、其方の義心を見込んで頼む』

『お案じなさいますな、千尋様の御本心はわかりませぬが、どっちにしろ、この淀平が、お附き申しているからにゃ』

『む、別れても、その一言を聞いておけば』

と、満足そうに、彼が、うなずいた時、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com